

1984年 Electro-Culture 会議の趣意書

1) 石器時代の昔から、文明の変革は技術によるときまっていた。交通、通信、上下水道、農具、工業と戦争、近代工業と農業の機械化及び原子核技術の開発は、その記念碑である。かようにして、社会の変革に対して哲学より大きい影響を持ち、公衆衛生に対しては薬よりも広い影響を与え、政府に対しては法律より、農業に対しては生物学より、又企業に対しては経済学より、より多くの影響を与えているものが技術であると言うことが出来る。技術の成果が社会を形成したという評価一にも拘わらず一或は多分その結果として一、技術者達は彼等の仕事に対する広い責任を持つことに不本意な気持を表明している。之には色々な理由がある。1つには技術の偉業と個々の技術者の行動との間に、スケールの差があり過ぎることである。更に、しばしば職業上の倫理憲章で述べられているにも拘わらず、彼等の雇用契約にその概念は記載されておらず、そしてそれが仕事の紛争の原因となっている。かくして多くの人々は” 価値から遊離した” 技術という表現の仮説を立てることを好んでいる。この考え方によっては、科学的研究や発展は、その技術が提供した多くのものと同様に、本来備わっている道徳／倫理の価値を持たない。技術者たちは単に、若干の公共の需要に対して、売れる製品とサービスを開発しようと試みることによって、社会に奉仕しているに過ぎない。相対的な価値や優先権を樹立するという事柄については市場や政府の法律にまかされている。如何に注目すべき発明又は発見が用いられるかという事は（それが有益であっても又は有害であっても）、全く独自の事柄であるとする考え方である。

2) かような技術が罹病率／死亡率の統計の改良の基礎になったという歴史の明白なる事実から、結局、社会にその技術者達によってよく奉仕されて来たと判断されることが出来る。しかしながら、夫々の技術的進歩は唯人類に利益を与えるだけのものという考え方は、個々の人間の経験に無関係な、広い歴史的な議論によってのみ（多分）攻撃されることが出来る。もっと鋭角的に、そして未来を見つめながら、技術の変化の洗練さ、規模及び速さの増加の結果として、重要なことは、科学技術の高度の教育を受けた人々により、公共に利益のために、科学／技術の発見、発明及び能力の社会的影響が注意深く学ばれるということである。之等の事柄を、法人組織の戦術家、政治家、社会学者及び歴史学者達に全面的にお任せするよりもましである。しかし、社会工学的解析は工学の学協会の中の議論の余地のある事柄として残されている。この心の動揺の1つの理由は、目的の基準がないために、如何なる評価もやや個人的に留まっているにも拘わらず、仕事がしばしば不完全であることである。他の1つは、分析を疑いながらも、社会活動における技術の恩恵を完了するという事柄に関して、影響下におかれた心にいただいた信念の中の味気なさであるにちがいない。進歩した技術の複雑さから見て、それに続くものは之等の問題の多くのものは困難であり、不確定な答であるということである。

3) 一般の物理学及び工学の教育は、技術の社会的及び政治的な側面を、本質的に重要性を減するような慣習の中で、一般的に行われて来た。自然の生気のない手法と同時代に存在した視野を反映した技術の専門の中に分類されて、トピックスは編制され教えられた。かくして、そこには機械工学科、化学工学科、電気工学科及び原子核工学科がある。かくの如きシステムの産物として、我々は極めて過度に単純化した視野を得ることになる。教育上の欠陥に妨げられることなく、勉強中の技術者にとって、終了するまでに長時間はとらない。しかし、技術と政治の関係については、めちゃくちゃな状態になっている。公益事業の規則、放送波長の割り当て、軍事開発、研究資金の供給、特許法、税法、通商と労働協約、環境政策、技術移転及び公衆教育は、やや広い例を提供している。技術の専門家としては、かような相互作用の比較的狭い部分集合のみが、個々の技術者の職業上の事柄であらうと言うことが本当らしいのである。しかしながら、我々は、狭い商業的焦点を乗り越えて、協力的に、より広範な透視図と問題の正しい評価を発展されることは、基本的

な重要事項である。

4) 同じ時代の生活の質と同様に社会改革の方向についての主な影響として、科学／技術の発見、発明、才能及び技術的政策は、公共の関心の中で、科学の高等教育を受け、かつ技術の社会に関するかかわり合いに対して特別な関心を払う方々によって、思慮深く、知識欲旺盛な学問を受けることは、不可欠なことである。この見たところ古臭い繰り返し文句が、高度の議論の的となるべき事柄の驚くべき範囲をとり囲んでいる。簡単に”公共の利益”と定義することの中に基本的困難がある。世界的対地方的、長期的対短期的、及び色々画かれた地政学的、社会経済学的及び文化的な部分群の見通しの中で、論争が起る。

I E E EやS P I Eの国際会員を意味するわけではないが、技術の普及した影響や相互に作用し合うように組合された世界的問題は、世界的見地から論ぜられる。しかし、”技術移転”についての増加しつつある国内的な討論、兵器の研究開発及び雇用問題は既に深刻な対立を引起している。

5) 技術と社会は相互関係がある。その中で、それぞれの科学／技術の分野の開発と方向付けは、社会／政府の政策の変化によって大きく影響される。又、夫々の政策の選択による開発の形態は、時間の関数として、異なった予想される危険或は住民の小グループに対する価格／利益のかかわり合いを持つであろう。そして形式主義に依存している。限られた資源であるから、二者択一を約束することは、他を犠牲にしなければならない。更に、同じ時代の科学の複雑さから、特定の技術の推進（または遅滞）の”予想した”ものとはっきり予見出来ない結論とは、共に不確定であり、論争するに足るものである。資本主義的民主主義の伝統は、之等の難しい決定を市場競争に委せており、それは経済原理の或る見解の下に、妥当な配分をかちとっている。しかし、この原理を受入れるということは、広い分け前と共によく情報の行き届いた筋の通った決定に対して、真に解放された競争市場を創り出すという問題に、単に作り直すに過ぎない。

6) 同時代の技術の研究開発の計画の、拡張された時間の枠、規模及び財政上の要求は、引受けた仕事に対して、直接か間接かの政府の予算上の支持が、絶対に必要なものであるという結果をもたらした。事が更に複雑化しているのは、实在または潜在する公共／環境の障害が技術的企業には伴うものであって、一つの有限なる惑星の上で、それは公共の利益に反するものと裁かれねばならない。かような評価は極端に複雑であって、天然痘の種痘から原子力まで広がる例を用いて論ぜられることができる。商業的な防衛地区は、潜在的な障害に対して完全に財政的な債務を引き受けるという、意志もなければ能力もない。又、このことについては、責任を分担する政府の本質的な役目がいくらかある。かような政府／工業の合同の企業が近代社会と高度技術の商業の下からの支えになっている。しかし国家の技術政策を樹立するために、よく情報が行き渡った全員参加の民主主義の要求を受け入れるという、特別な興味については気が進まないのである。勿論このような事柄が特別な専門的技術を要するという概念はやや妥当性がある。しかし開放された学者らしい技術討論に対する必要性とその価値に対しては、之は全く見当違いのことである。技術の社会に対するかかわり合いに関する意見の相違を見出すことは、人を驚かすことでも、びっくりすることでもない。丁度科学それ自体と同様に、開放された活気あふれた討論と批判的な仲間の見解は、市場選択と考え方の競合的洗練さに対して、きわめて重要である。

7) 悲しいことには、直接の経験から、S P I E、I E E E及び他の科学技術の学協会では電算機、通信、レーザー及び他の多くの題目に関する機密扱いでない科学技術情報の提供に対する会議の組織化に、困難があることを承知している。公共の政策問題が、我々の国家的及び世界的な技術を基礎とした経済の商業的活力に寄与することと同様に、之等の事柄は解放された討議と討論を要求している。このような活動の助成は、I E E EやS P I Eの規約の目的である。10年近く前にI E E Eは技術委員会の構成を次のように権威づけた。”I E E Eの会員の間で、社会において彼等の技術の効果に対する敏感さを推

進することとその効果を予言し、評価する方法を考え出すこと”。本質的に社会的技術の解析は論争を含むものであり、進歩は困難であり、そして業績ははっきりしない。しかし、委員会は I E E E の承認された技術協会 (Society) となって生き残り、季刊の” I E E E Technology and Society Magazine”を発行し、 S P I E と協力して” Electro-Culture 1984”を組織した。

8) S S I T は技術からもたらされる社会の利益の理解と増進に寄与する広い目的をもって学術的な技術の学問として、技術の社会に関するかかわり合いの学問を推進するために創設された。S I T の会合や刊行物は、このような事柄の議論のための討論の場を提供するものである。明らかなことは、著者により表現された見解は彼等自身のものであり、討論とその後の解析のために提供される。我々の Society は途方もなく複雑な社会問題の解析において、技術者や科学者が、能力、教育及び経験によって、広く寄与するための潜在的な能力を持っているという所信にささげている。この社会問題の多くのものは絶対必要な技術的成分を持っている。しかしながら、この仕事は浅はかには請け負ってはならない。何となれば孤立の中で技術的性質を正しく取り扱うことが出来ないであろうということと、完全無欠のために”システム解析”の形式主義を応用することも不可能であるからである。かような問題を技術者と一般公衆の両者の間に、より大きな評価を発展させるのが我々の目的の1つである。

9) Electro-Culture 1984 のプログラムは、半日づつの4つの部会から成っており、5月1日と2日の行われる。ロボット工学、自動制御、社旗及び労働、電算機や通信の私生活と安全保障、政府が押し付けている機密と技術移転、宇宙兵器である。刊行された予稿に寄与している発言者兼著者は十分明確に書いているので追加の紹介文は必要ない。部会の組織者及び部会長の分担は又感謝の念を持って次のようにお知らせする。

John Jackson, University of Kentucky, (Robotics)

Thelma Estrin, National Science Foundation (Privacy)

Stephen Ungar, Columbia University, and William George, Aviation Week (Secrecy)

and Kosta Tsipis, Massachusetts Institute of Technology, (Weapons)

夫々の部会は聴衆を巻き込んで討論するように活発に刺激を与える。S S I T の役目として”最も論争的な題目”の議題を選ぶことは困難なことである。宇宙兵器は確かに強力な候補であるが、Tsipis 教授の良心的な努力によって、この題目の提供については有益な、鋭い対照的な見解の範囲において準備せられた。Unger 教授は又、技術的プログラムの調整者として彼の助力は感謝されねばならない。

10) S P I E の会員、職員および事務の方々の支持、配慮及び事前の打ち合わせは企画に非常に役立った。よかれ悪しかれ、多くの過去の S S I T の活動においては、組織の努力は、時々、技術会議のプログラムを計画するより、外交的な条件交渉に近いように思われた。之は確かにがっかりすることであった。しかしながら、私は之等の幻滅を感じさせ、落胆さえさせる問題は、仕事を苦しい立場に置くという差し迫った欲求を示すことを信ずる者の一人である。

既に知れ渡ったように、部会の議題、発言者及び聴衆の分担は、明敏な学問的な解析と大きな重要性のある社会的技術の問題の範囲の討論であった。私は S P I E 及び I E E E はこの業績について正当な誇りを持つことができると信ずる。

R. J. Bogumil
会議の委員長

Electro-Culture 1984

Preface

1) From the stone Age, epochs in civilization are defined by technology. The development of transportation, communication, water supply and sanitation systems, implements for agriculture, industry and war, modern industrial and agricultural mechanization and nuclear technology are landmark events. Thus it can be argued that engineering has exerted a greater influence than philosophy on social evolution, that engineering has had a more pervasive impact than medicine on public health, and that engineering affects government more than does law, agriculture more than biology, and industry more than economics. Despite--or perhaps as a result of--the extent to which engineering achievements shape society, engineers manifest a reluctance to accept broad responsibility for their work. There are various reasons for this, one being the enormous difference in scale between "engineering achievements" and the actions of individual engineers.

Mereover, the concept is not written in their employment contract, although frequently expressed in codes of professional ethics, and is a potential source of job threatening conflict. Thus, many prefer to hypothesize a notion of "value free" technology. By this view, scientific research and discovery as well as much of its technological implementation has no intrinsic moral/ethical value. Engineers simply serve society by attempting to develop cost-effective goods and services for which there is some public demand. The matter of establishing relative values and priorities is left to the marketplace and government regulation. How a particular invention or discovery is used (i.e., for benefit or harm) is thought to be a quite independent matter.

2) From such incontrovertible facts of history as the technologically based improvements in mortality./morbidity statistics it may be judged that, on balance, society has been well served by its engineers. However, the idea that every technological advance has only benefited mankind can only (possibly) be defended by broad historical arguments that have no relation to individual human experience. More acutely, and looking to the future, attendant on the increasing sophistication, scale, and pace of technological change, it is vital that the social impact of scientific/engineering discoveries, inventions and capabilities receives careful study, in the public interest, by people with advanced engineering and scientific training, rather than leave the matter entirely to corporate strategists, politicians, sociologists and historians. But sociotechnical analysis remains a controversial matter in engineering professional societies. One reason for this ambivalence is that the work often has been poorly done, though in the absence of objective standards any assessment remains somewhat personal. Another reason must certainly be the discomfort in subjecting cherished beliefs regarding the societal benefits of technology to close, questioning analysis. From the complexity of advanced technology, it follows that many of these questions have difficult, uncertain answers.

3) General physical science and engineering education is commonly presented in a fashion which inherently deemphasizes the social and political aspects of technology. Topics are organized and taught by classification into technical specialties that reflect contemporary views of natural inanimate processes. Thus there are departments of mechanical, chemical, electrical and nuclear engineering. As products of such a system we may acquire some remarkably simplistic views. Notwithstanding deficiencies in education, it does not take long for engineers in practice to observe the close, but chaotic, relationship between technology and politics. Utility regulation, broadcast spectrum assignment, military development, research funding, patent law, tax law, trade and labor

agreements, environmental policy, technology transfer, and public education provide a few broad examples. As a technical specialist it is likely that only a relatively narrow subset of such interactions will be of professional concern to an individual engineer. However, it is of fundamental importance that we develop, collaboratively, a more comprehensive perspective and an appreciation of issues beyond a narrow commercial focus.

4) As a major influence on the quality of contemporary life as well as on the direction of societal evolution, it is vital that scientific/engineering discoveries, inventions, capabilities, and technology policy receive thoughtful, questioning study, in the public interest, by individuals with advanced training in science and special concern for the social implications of technology. This seemingly trite refrain encompasses an astonishing range of highly controversial matters. There are fundamental difficulties simply in defining "public interest." Conflicts arise between global vs. local, long-term vs. near-term, and variously drawn geopolitical, socioeconomic and cultural subgroup perspectives. The pervasive impact of technology and interactively coupled world problems, not to mention the international membership of IEEE and SPIE, argue for a global view; but the increasingly nationalistic debate of "technology transfer," weapons R & D, and employment issues is already strongly divisive.

5) The relationship between technology and society is reciprocal in that the development and direction of each scientific/technological field can be significantly influenced by a variety of social/governmental policies and the pattern of development resulting from each policy option may have different anticipated risk or cost/benefit implications for population subgroups, as a function of time, and contingent upon externalities. With limited resources, one promising alternative must be sacrificed to another. Moreover, from the complexity of contemporary science, both "anticipated" and less clearly foreseen consequences of promoting (or delaying) a specific technology are uncertain and debatable. The traditions of capitalist democracy leave these difficult decisions to market competition which, under certain tenets of economic theory, achieves the appropriate resource allocation. But accepting the theory only recasts the problem to one of creating truly open, competitive markets for well informed, reasoned decisions with broad participation.

6) The extended time-frame, scale, and monetary requirements of contemporary engineering research and development projects have the result that direct or indirect government financial support is essential to the undertaking. Matters are further complicated by the existence of real, or potential, public/environmental hazards associated with technological enterprise that, on a finite planet, must be judged against social benefits. Such evaluations are extraordinarily complicated, as can be argued using examples ranging from smallpox inoculation to nuclear power. The commercial sector is neither willing, nor able, to assume full financial liability for potential hazards, and in this also it is in some measure a proper role of government to share responsibility. Such joint government/industry enterprise constitutes the very underpinning of modern society and high-tech commerce, yet there is a reluctance by special interests to accept the requirements of informed, participatory democracy in setting national technology policy. Of course, the notion that such matters require special expertise has some validity, but this is quite irrelevant to the need for and value of open, scholarly technical debate. It should not be surprising nor alarming to find a diversity of opinion regarding the social implications of technology. Just as in science itself, open vigorous debate and critical peer review are crucial to marketplace selection and competitive

refinement of ideas.

7) Sadly, from direct experience, SPIE, IEEE and other scientific/technical societies are well aware of the difficulties in organizing conferences for the presentation of unclassified, scientific or technical engineering information dealing with computers, communications, lasers and many other subjects. Because of the public policy issues involved, as well as its contribution to the commercial vitality of our national and global technologically-based economy, these matters require open discussion and debate. The furtherance of such activities is the constitutional purpose of IEEE and SPIE. Little more than a decade ago, the IEEE authorized formation of a technical committee "...to promote among IEEE members a sensitivity to the impact of their technology on society and to conceive means to predict and evaluate that impact." By its nature, sociotechnical analysis involves controversy, progress is difficult, and accomplishments intangible. But the committee survived to become a recognized technical society of the IEEE, to publish a quarterly journal IEEE Technology and Society Magazine, and to organize Electro-Culture 1984 in collaboration with SPIE.

8) SSIT was established to advance the study of social implications of technology as a scholarly, technical discipline with the broad objective of contributing to the understanding and enhancement of the social benefits derived from technology. SSIT meetings and publications provide a forum for debate of such matters. Clearly, the views expressed by authors are their own, presented for discussion and further analysis. Our Society is devoted to the belief that engineers and scientists--by ability, education and experience--have the potential to contribute broadly in the analysis of enormously complicated social issues, a great many of which have an essential technological component. However, this task must not be undertaken naively for it may neither be possible to properly treat the technical aspects in isolation nor to apply a "systems analysis" formalism to the totality. It is one of our objectives to develop greater appreciation of such problems among both engineers and the general public.

9) The Electro-Culture 1984 program consisted of four half-day sessions, held on May 1 and 2: Robotics, Automation, Society, and Work; Computer and Communications Privacy and Security; Government Imposed Secrecy and Technology Transfer, and Weapons in Space. The speaker-authors contributing to the published proceedings have written with sufficient clarity so that extended introductory remarks are not required. The participation of session organizers and chairmen should also be acknowledged with gratitude: John Jackson, University of Kentucky, (Robotics); Thelma Estrin, National Science Foundation, (Privacy); Stephen Unger, Columbia University, and William Gregory, Aviation Week (Secrecy), and Kosta Tsipis, Massachusetts Institute of Technology, (Weapons). Each of the sessions stimulated lively audience involvement and debate. At SSIT functions the title of "most controversial subject" can be a difficult choice. Weapons in Space is certainly a strong candidate and through the conscientious efforts of Professor Tsipis the presentations on this topic provided a range of informative, sharply contrasting views. Professor Unger must also be acknowledged for his further assistance as technical program coordinator.

10) The support, concern, and forbearance of SPIE officers, executives, and staff contributed enormously to the undertaking. For better or worse, as in many past SSIT activities the organizing effort, at times, seemed more like diplomatic treaty negotiation than technical conference

program planning and this certainly can be disheartening. However, I am one of those who believes that these disillusioning, even dismaying, problems simply indicate the need to press on with the work. As it transpired, the session topics, speakers and audience participation provided incisive, scholarly analysis and debate of a range of sociotechnical issues of great importance. I believe that SPIE and IEEE can take justified pride in this accomplishment.

R.J. Bogumil
Conference Chairman

技術の社会との関わり合い研究会(日本チャプター)

IEEE (Institute of Electrical and Electronics Engineers) の SSIT (Society on Social Implications of Technology) は 1982 年に創設され、現在は全世界で約 2 千人の会員が居ます。

現在の研究範囲は下記のようなものです。

- ・ 環境や健康・安全との関わり
- ・ 技術者の倫理と職業上の責任
- ・ 電気工学の歴史
- ・ 秘術的専門調査と公共政策
- ・ 平和技術
- ・ エネルギー、情報工学、電気通信に関する社会的問題

また、IEEE Technology and Society Magazine (quarterly journal) を刊行するほか
定期的会議である The International Symposium on Technology and Society
のスポンサーです。

日本チャプターは 1983 年に東京支部内に設立されましたが、その後支部が国内各地方に出来ました。しかし SSIT 会員数は約 40 名で少ないために日本支部内に設置されています。

研究範囲は上記のように、技術を社会に役立たせるための必要項目を研究するものです。人間生活との関連が深いために、生活環境・倫理・歴史・政策・平和等々の従来の技術者が不得意だった部門との共同作業が必要であり、民主主義社会では簡単には結論の出せないものばかりです。

しかし技術の影響力が大きくなるにつれ無視できない状況が増えてきています。経済至上主義社会の矛盾を強く感じます。

即物的技術と概観的哲学を駆使した観点が必要になります。

日本技術士会の方々は技術の最前線で社会の方々と直接触れている方々です。一方学究の方々は高遠な理論で極限理論を探求されています。SSIT 東京支部は大学教授と技術士の両者を兼ね備えた方が設立に尽力なされました。好ましい環境で設立されましたが成果は未だの現状です。

人類の理想を求める技術者の方々の積極的参加を切にお願いいたします。

因みに IEEE チャプターの活動目的は、

IEEE 会員が人間的にまた専門家として成長することを手助けする貴重な機会を、地域の状況に応じてきめ細かく提供することです。

Japan Chapter of Society on Social Implications of Technology

SSIT (The Society on Social Implications of Technology (SSIT) of the Institute of Electrical and Electronics Engineers (IEEE) was established in 1982 and has about 2000 members worldwide.

The scope of the society includes such as

- issues as environmental, health and safety implications of ;
- engineering ethics and professional responsibility;
- history of electrotechnology;
- technical expertise and public policy;
- peace technology;
- social issues related to energy, information technology and telecommunications

SSIT in Tokyo section was established in 1983. Recently, many sections are established in Japan. However, SSIT members in Japan are about 40, so too little to establish in a section. At present, SSIT in Japan chapter took over the task.

In order to treat the above scope, sophisticated wide solutions would be necessary in spite of weak field for engineer.

The doctrine of economy for economy's sake would must be modified considering philosophical technology. Active members intending to technological human welfare are welcome to SSIT.

平成12年2月7日

SIT日本委員会について

村主行康

1・設立の経緯

IEEE-SIT (Social Implications of Technology) 研究会の目的は

- ・技術の健康・安全との関わり
- ・技術者の倫理と職場責任
- ・SIT関連技術者教育
- ・電子技術の歴史
- ・技術家の意見と社会政策
- ・エネルギー関連社会的効用
- ・情報技術関連社会的効用
- ・電気通信関連社会的効用
- ・公共政策決定のシステム解析
- ・技術関連経済効用
- ・平和技術

とされています。

IEEE本部のSITは1952年に創設されました。世界中での会員数は2000名程度です。SIT日本委員会は翌年、昭和58年8月5日に設立認可されました。会員数は日本全国で約40名です。

2. 設立後の動き

設立にご尽力なされた木村久男氏は日本技術士会内でも当時からで **engineering ethics** を特に意識して居られた気がします。

倫理問題はもちろん最近の国際問題・環境問題を考えれば、上記の社会を意識した研究目的は技術者として当然なすべき課題ですが、最近までは国内企業の利益第一主義もあり十分な理解が得られず我々の今後のPR努力の必要なところです。

SIT日本委員会の会員数約40名は設立時から殆ど増えも減りもしない状況ですが、今後はその必要性に鑑み1桁の会員増を志したいと思っています。

設立当初から日本技術士会・情報化研究会と一緒に原則毎月研究会を開催していますが、ここ数年は10～20名程度が参加しています。最近では電子情報通信学会・「情報文化と倫理」(FACE)研究会と年1回程度の共催研究会も開催しています。

3・歴代役員

最近になり京都工芸繊維大学の笠原教授が委員長を勤めていますが、SITの使命の重要性から会員増を図り、役員任期も規則通りに1年で済むようにしたい。

歴代役員	Chairman	Vice Chair	Secretary	Treasurer
1984年	木村久男	村主行康	上村勝彦	上村勝彦
1985年	木村久男	村主行康	上村勝彦	上村勝彦
1986年	秋山守男	村主行康	村主行康	木村久男
1987年	秋山守男	村主行康	村主行康	木村久男
1988年	秋山守男	村主行康	田中正智	村主行康
1989年	秋山守男	村主行康	田中正智	村主行康
1990年	秋山守男	村主行康	田中正智	村主行康
1991年	秋山守男	村主行康	田中正智	村主行康

1992年	村主行康	丹羽俊太郎	田中正智	丹羽俊太郎
1993年	村主行康	丹羽俊太郎	田中正智	丹羽俊太郎
1994年	村主行康	田中正智	飯田尚志	田中正智
1995年	村主行康	田中正智	飯田尚志	田中正智
1996年	村主行康	田中正智	杉浦 行	田中正智
1997年	村主行康	田中正智	杉浦 行	田中正智
1998年	笠原正雄	村主行康	小松尚久	秋富克哉
1999年	笠原正雄	村主行康	小松尚久	秋富克哉
2000年	笠原正雄	村主行康	小松尚久	秋富克哉

4. 工学倫理教育

米国では工学教育課程の5認可基準の中に工学倫理関係の2項目がある。

- 即ち
- ・エンジニアリングとその実践が持つ倫理的問題の理解の深化
 - ・職業上の責任及び大衆の衛生と安全を守るために工学者が担う責任に対する理解の深化

技術者が受ける高い報酬と特権は、社会に不可欠なサービスを責任を持って可能にし、その見返りとして社会から与えられるものである。その様な社会からの尊敬を維持するためには技術者は社会からの信頼に応える義務がある。

5. これから

SIT日本委員会では最初は工学者の倫理問題に着目したが、当時は社会的な関心を得られず、そのために環境問題からのアプローチも試みた。

SITの担当項目の中に各種技術の社会的効用等技術政策関連の問題もあることから、官庁研究所でも関心を持つべきものと考え努力もしてきた。

最近では技術の社会への影響力の飛躍的増大に鑑み、技術成果の総合的影響評価方とその早期実現方の研究が強く要望されるようになった。

最近の情報通信特にネットワーク社会の急速な発展とその影響を考え、この方面の他研究会との共催等により、社会からの要望に早急に応える努力をしたい。

1. 会員募集

従来は技術と社会は分離された考え方で来た。しかし次第に形而上学と形而下学との境界が漠然としてきた。

従来は社会の動き方は先哲の遺勲に学び、歴史は繰り返すとの考えで進められてきた。時代の変化が大きくないときはそれでも社会秩序は保たれてきたが、最近の科学技術の急速な進歩に対しては社会秩序が追いつけなくなってきた。

歴史的統計学では時間がかかる。勿論最近科学技術に於いても短時間相関関数を用いて本来ならば無限大時間で行うべき計算を、例えば音声処理などでは20msに縮めている。科学技術の進歩を社会に於いても心の領域に拡張し幸福即ち秩序の維持に勤める必要があろう。

昭和59年11月26日

電気四学会・会長殿

「電気、電子通信、照明、テレビジョン」

拝啓、菊薫る季節、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

さて、昨年(1988年8月)IEEEのTokyo Section 内にTokyo Chapter on SIT (Social Implications of Technology)が発足致しまして、2年目を終ろうとしております。SITなるSocietyもIEEEの中では最も新しいもので、従ってそのTokyoChapterも、世界で7番目のChapterであります。SITのSocietyの学問領域も、始めは漠然としておりましたが、どうやら今回明文化して参りました。(別紙Scope of the Society on Social Implications of Technology 参照)

IEEEのTokyo Section の内規のようなこととして、「Tokyo Section は学会活動をしてはいけません。理由は我国内の学協会としての「競合」を絶対に避けるため」となっております。ところが、IEEEの本部からは「学会活動は大いに活発にやってくれ」と云って来まして、Meeting 毎にReport を出して奨励しております。

この「板ばさみ」状態を打破するために、TokyoSection では国内の学協会と協力(表現は共催でも協賛でも可)以外に方法がないわけでありまして。この具体案は若干の研究会などで既に実施されておりますし、IEEEの本部でもそのことは了承しております。

然しながら、このSITに関しましては、我国内の学協会には関心の少ない「新しい学問」ではないかと見られております。そこでお願いでございますが、この新しい領域の学問に関しまして、貴学会におきまして、委員会か研究会を新設して頂き度く存じます。そして、そのグループとTokyoChapter of IEEE Society on SITとの協力関係を作り上げて頂ければ幸に存じます。しかし差当ってすぐに委員会というわけにもゆかないかと存じますが、その場合には、どなたか御興味をお持ちの方若干名を夫々の学協会からすいせんして頂きまして、SITのTokyo ChapterのMeetingに御出席下さいますよう、御高配を賜わり度く、お願い申し上げます。

終りに、晩秋の候、皆々様の御健康をお祈り申し上げます。

敬具

木村久男

Chairman of Tokyo Chapter
of IEEE Society on SIT
(Social Implications of Technology)

(別紙)

Scope of the Society on Social Implications of Technology

技術の社会に対するかかわり合いに関する学会の領域

1. Health and Safety Implications of Technology

技術の健康と安全に関するかかわり合い

2 Engineering Ethics and Professional Responsibility

技術者の倫理と職業上の責任

3. Engineering Education in Social Implications of Technology

S I Tにおける技術教育

4. Public Education in Social Implications of Technology

S I Tにおける公衆教育（社会教育）

5. History of Electrotechnology

電気工学の歴史

6. Technical Expertise and Public Policy

技術的専門調査と公共政策

7. Social Issues related to Energy

エネルギーに関する社会問題

8. Social Issues related to Information Technology

情報工学に関する社会問題

9. Social Issues related to Telecommunications

遠隔通信に関する社会問題

10. System Analysis in Public Policy Decisions

公共政策決定におけるシステム解析

11. Economic Issues related to Technology

技術に関する経済問題